

令和7年度「京都市都市計画審議会 第5回都市計画マスタープラン部会」
会議録

日時：令和8年3月5日（木） 午後6時00分～午後8時00分

場所：京都市役所 分庁舎4階 第4・5会議室

出席者：麻生 美希 同志社女子大学教授
市木 敦之 立命館大学教授
川崎 雅史 京都大学大学院教授
是永 美樹 京都女子大学准教授
関口 春子 京都大学准教授
谷本 圭子 立命館大学教授
檜谷 美恵子 京都府立大学名誉教授
森 知史 京都市住宅供給公社副理事長
山田 忠史 京都大学大学院教授

以上9名（五十音順、敬称略）

※ 児島 宏尚（京都商工会議所専務理事）
平尾 和洋（立命館大学教授）の2名は所用で欠席

1 開会

——（事務局から委員の出席状況報告）——

2 会議の公開・非公開の決定

・議事について公開に決定

3 議事

（1）次期「都市計画マスタープラン」素案について

——（事務局から資料1、2、3、4に基づき説明）——

●第1章 都市の将来像、第2章 テーマ別方針

○谷本委員

6 ページの第2章のテーマ別方針について、第1章「都市の将来像」で「職住共存・職住近接の追求」が挙げられていた。すると、この第2章 テーマ別方針の1と2は、1が「働く場」、2が「暮らし」という形で分ける方が良いのではと思った。

また、「1 活力・賑わい」で、「世界に類を見ない価値を創造するまち」

「夢中と感動に溢れた人生とまち」といった魅力的な言葉がある中で、ア①とア②はそうだなと感じるが、ア③の「道路ネットワークの充実」の部分は、もし書くのであれば「効率的な道路ネットワークの形成」なのかなと思った。

道路ネットワークについては、2「暮らし」のイ「繋ぐ・動く」という部分で「公共交通」や「ウォークابل」に触れ、イ②では「ウォークアブルなまちづくり」と書かれている。この辺りの関係が、働く場は「道路ネットワーク」、暮らしは「公共交通」や「ウォークابل」と分断されているように感じる。もう少し融合した書き方が良いのではないか。

さらに、イ①の「商業機能等の集積」というタイトルだが、ここでは「商業機能だけでなく～」とされているため、「商業機能や文化施設など多様な機能の集積」というタイトルにした方が、魅力が伝わるのではないかと思った。

○事務局

道路ネットワークは働く場だけでなく、住まいにももちろん関係すると思っている。どちらに記載したとしても正解だと思っているが、本文中に「ものづくり都市・京都」を支える都市の骨格として、効率的で効果的な道路ネットワーク形成を進める。」としていることから、産業を支える機能として提示した。

○川崎部会長

産業を支える意味で物流を中心とした幹線計画等は第2章の1に入れて、第2章の2では徒歩や自転車等のウォークアブルな要素や公共交通を中心として、誰が主体となるかということをあえて分けて書いていると認識した。ただし、要素として「働く」にも「暮らし」にも入れていくことは当然あり得ると思う。

○谷本委員

あえて別々に考えるならばこういう書き方になるのは理解するが、せっかく、1アで「究める 世界に類を見ない価値を創造するまち」としているのだから、それに見合ったことのみを採用するのも良いのではと感じた。仮に道路や交通のことを書くなら、もう少し魅力的な書き方が良いのではないか。「道路ネットワーク」は普通だという印象を受けた。

○山田委員

「また道路のことか」となるため、道路の記載はいらないと思っている人が多い。将来の京都に道路がどう役立つかを付け加えた方が理解が深まるのではないかと感じる。

○川崎部会長

国交省のW I S E N E T（ワイズネット）のようなことか。

○山田委員

そういうのもあり得るかもしれない。

○川崎部会長

1ア②の「地域で受け継がれてきた歴史・文化、匠の知恵や技をいかしつつ、クリエイティブ産業を支えるまちづくりを進める。」とあるが、デジタル先端技術をいかしたうえでクリエイティブ産業を作っていくという認識で良いか。

○事務局

基本構想にもあるが、伝統をいかしながらも新しい技術を導入していくことが京都の特徴であり、御指摘の意味は抜けていると思う。道路ネットワークについて、物流は血流みたいなもので、ものづくりの価値も創造も循環していかないといけないということで書いていたが、表現があまりにも旧態依然としていてなじんでいないと理解した。もう一步進んだ表現を検討する。

谷本委員御指摘の1イ①のタイトルについても、本文に書いてあるように、色々な動きが分かる魅力的な表現を検討する。

○川崎部会長

デジタルアートのようなものが大きく出てきている時代なので、デジタル的な情報の展示や文化と重ね合わせるようなイメージも含まれていると思う。商業施設というだけでは面白くないように感じる。

○山田委員

7 ページの「安心・安全」の③「レジリエンス」という言葉についてだが、学問的にいうと、①も②も全てレジリエンスであるため、もう少しこの③の中身に合わせた言葉を付けた方が良いと思う。一つの案としては、「共創によるレジリエンス」が考えられる。本当は「共創による地域防災力の強化」だと思うが、キャッチーさを求めるなら「レジリエンス」をいかしつつ「共創によるレジリエンス」が良いのではないか。

それから、8 ページの④「京都にふさわしい産業」という言葉は少し気になった。「京都にふさわしい産業」に学問的な定義はないが、複数のAIに尋ねてみると、意見が分かれるものの、共通しているのは「伝統産業と観光」なので、狭い意味では「伝統産業と観光」ということになってしまう。これは好ましくないのではないか。良い言葉だと思うが、人によって定義が異なる可能性があるため、「エリアの個性をいかした産業」とすれば合致すると考える。実際、京都には任天堂や島津製作所のようなハイテク・精密機械産業もあり、文化・クリエイティブ産業、スタートアップ（バイオ、ライフサイエンス）などもエリアによっては考えられると思う。

○川崎部会長

地域の切分けとして、「ものづくり産業集積エリア」とあるが、説明文も「ものづくりを主とした～」等で限定した表現にすることも一つの考え方と感じた。

○山田委員

確かに、表題が「ものづくり」に限定されているため、その中で「京都にふさわしい産業」であると理解した。そういうことであればあり得ると思う。

○檜谷委員

7 ページの4 安心・安全 ア③「レジリエンス」についてだが、見出しは山田委員の御指摘を修正してもらおうとして、中身を見ると「地域コミュニティと連携する」というソフトな施策が論じられている。さらに、イ「支え合う」でもキーワードで地域コミュニティの話がでてくるのだが、「安心・安全」の中に全て地域コミュニティを入れるのはいかなものか。御説明にあったように、民泊にまつわる課題をここに入れ、「安心・安全」というと、排他的に聞こえ、外国人を排除するようなイメージを与えかねない。むしろ、コミュニティについては「混ざる」、「交じる」という生活文化としての側面から記載してはどうか。現行のマスタープランでは「暮らし」の中にコミュニティが入っていた。コミュニティについては、どこにでも入れられるものだと思うが、あえて「安心・安全」に入れるのがふさわしいのかと思う内容も含まれているので、検討してはどうかと感じた。

どのように市民に読まれるか気になった部分としてもう1点あげたい。2「暮らし」のところで、具体的には、ア「住まう」というタイトルで、「住みたい場所に住むことができるまち」とされていることである。ここでは、ソーシャルミックスや用途ミックスといった、「ミックス」のイメージが想定されているという理解で良いか。これまでソーシャルミックスについては、こうした文脈ではあまり触れられていないように思う。多文化共生や多世代共生についての言及はあるものの、これが全体としていえているのか、説明になかったので気になった。

また、5 ページを見ると、3 (2)「暮らし」の本文は「ウェルビーイングなまち」となっている。現行の都市マスは便利さや快適性を強調していたが、次期都市マスでは福祉的な視点を強調し、異なる角度から暮らしを見ていることからこのような言葉遣いになっている、という理解で良いか。

○事務局

おっしゃるとおり、そういう見方をするとタイトルと合っていないと

感じる部分もあるかもしれない。

「住みたい場所に住むことができるまち」について、①の本文に書いてあるように、ライフステージに応じて、単身から家族を持ち、子供ができてからの住替えも含め、多様な居住形態がある、という議論をこれまでさせていただいていた。そのため、ソーシャルミックスという観点については、そこまで深い論点となっていなかったが、事務局としては、これまで部会で議論された用途ミックスの考え方で、多様な交流のある豊かな暮らしを目指すという方向性を打ち出すことを意図していたが、少し分かりにくい書き方になっていると感じた。

○川崎部会長

6 ページの檜谷委員の御指摘は、ミックスが全体に浸透しているか、という話だと思ったがいかがか。

○檜谷委員

両方のミックスがあると思う。この2、30年、欧米では都市計画を見直す中で、「ミックス」というキーワードを、用途のミックスとソーシャルミックスの2つの観点で使っている。今回、用途ミックスについては、かなり言及されている。しかし、ソーシャルミックスについては、あまり議論されていなかったように思う。例えば、公営住宅の配置を根本的に見直す、といった議論はここではなされてこなかった。他方、「どこにでも住みたいところに住める」という表現は、ソーシャルミックスをイメージさせるように感じたので、そういう理解で良いか、という質問をした。

○川崎部会長

2ア①の2段目「住環境に配慮しながら、多彩な用途が適度に混在」というのは、用途ミックスの話である。しかし、ソーシャルミックス、例えば公営住宅配置のような事実上の空間や社会基盤も含めたミックスの話は、ここにはあまり出てこないということか。2ア②の「日常生活エリア」における「施設配置」、「安心・快適な生活圏の形成」といった意味合いが少し弱いということか。

○檜谷委員

そのとおり。「住みたい場所に住む」というタイトルをもう少し工夫できないかと思った。

○川崎部会長

もう一つの「安心・安全」で御指摘いただいた点についてだが、例えば、4イ①で「～まちづくりをこれからも大切にして、地域活動が活発な都市を目指す～多彩なつながりを持ち、安心と愛着を抱きながら～」という言葉があるが、「安心・安全」は、災害時の相互扶助のみならず、

さらに活動を促進するコミュニティや推進力のあるコミュニティといった両面で書くべきではないか。災害時に相互扶助できないコミュニティでは、安心とはいえない、という意味も含まれるので、ここに書いたと思ったがいかがか。

○事務局

そのとおり。コミュニティは「交ざる・憩う」など「暮らし」の要素として入りそうだが、今回、「安心・安全」に入れたのは、災害時に役立つコミュニティは日常から必要であるといった考えがあったためである。

○檜谷委員

それは十分に理解しているつもりだが、その点は4ア③の「レジリエンス」でかなり書かれている。それに加えて、ここでいうコミュニティが何なのか、という点で、より文化的な、あるいは福祉的なものだったら違和感がないが、「安全」といわれると「排他性」に結びついてしまうのではないか、という危惧を抱いた。

○事務局

檜谷委員の御提案は、4ア③「レジリエンス」と4イ①「多様なコミュニティ活動」がかなり重複する部分があるから、あえて分けて、コミュニティ論を論じるのであれば、純粋な日常のコミュニティ論については、むしろ「住まう」の方が座りが良い、という御意見で良いか。

○檜谷委員

そのとおり。「住まう」でも良いし、「生活文化」、「文化」又は「暮らし」など、いずれでも良いと思う。

○事務局

レジリエンスの方をもう少し厚く表現し、コミュニティの方は、暮らし等のよりコミュニティに特化した表現を検討する。

○川崎部会長

レジリエンスの方は、災害時の相互扶助だけでなく、治安という側面もある。外国人排除という意味ではなく、人口減少により目が届かなくなる中で、治安システム、情報システムなどを活用した治安維持をどう考えるか、という視点も重要である。災害時と日常の治安維持をしっかりと確保し、もう一つの文化交流の発展のような側面は、「暮らし」の方に記載してはどうか。

○谷本委員

高齢者の方の見守りなどを考えると、「安心・安全」という言葉は、単に災害や治安だけでなく、暮らしにも関わると感じる。特に京都は、高齢者の多い地域であることを考えると、この4イ①の「支え合う」とい

う項目は、割と違和感なく受け入れられた。もちろん「暮らし」にも関わる話なので、完全に切り分けられることでもないと思う。

○川崎部会長

両方大事で難しい。同じ場所で同じフェーズのものが起こっている。当然クロスする場所が多くあるが、概念的にフェーズを整理して書いているだけのことだと思う。

また、「安心・安全」の所で、コミュニティの話ばかりだが先端的な防災技術や治安システム、情報技術、AIなどを駆使するといった要素も示唆しておいて、「安心・安全」を構築すべきではないかを感じる。「暮らし」の前に「安心・安全」があつて初めて「暮らし」が生まれる、くらのイメージを個人的には持っている。情報インフラを含めた「安心・安全」を担うインフラを、もっと先端的に「しっかり見守っていますよ」という方向へ進んでいくと良いと思う。また事務局として書ける範囲で、表現の整理をしっかりと考えていただきたい。

○市木委員

「安心・安全」の所を膨らませるなら、7 ページ4イの「支え合う」の所を膨らませると良いと思う。同時に、議論されている4イ①は「多様なコミュニティ活動」がタイトルだが、読み方によっては「多様なコミュニティ活動の問題点」を挙げているようにも読める。「多様なコミュニティ活動はありつつも、安全である」という風に表現を修正された方が良いのではないか。

また、5 ページの一番上の「コンパクト・プラス・ネットワーク」という表現について、ここだけこの形で出てきており、その他は「コンパクト×ネットワーク」とされている。あえてこの用語として使われている意図があるのか。「コンパクト・プラス・ネットワーク」という表現も、一般の人には少し読み取りにくいかもしれないため、括弧書き等で説明を補足すべきではないか。

それから4 ページ、(2) 3 番目の○印である「社会の変化にあわせ適切にアップデート」内にある、「スクラップアンドビルド」という言葉が一語で書かれている。「コンパクト・プラス・ネットワーク」は中点を使って言葉がつながれており、用語としての使い方があると理解しつつも、一つの図書の中では、表記の仕方を統一した方が見栄えが良いかと思った。

○川崎部会長

「コンパクト・プラス・ネットワーク」は、立地適正化計画やコンパクトシティ構想が出て以降、「×ネットワーク」で生活圏域を拡大する、という考え方で、物理的な空間は小さくするが、そこに住む人たちの広

域な交流圏・行動圏を拡大するという意図がある。自転車や公共交通などを活用し、駅からの移動なども含め、コンパクトシティでありながら、ネットワークによって生活行動圏域を増やすということを考えていくものである。これは、日々様々な新しい政策が出されているところで、都市計画に携わる者からするとこれからよく使う話題だと思うが、他の委員の方はいかがか。あまり聞き慣れないか。

○事務局

川崎部会長からの御発言のとおり、今までは「コンパクト・プラス・ネットワーク」という形で、「小さくしてネットワーク化する」という形であった。しかし、(3)のタイトル「コンパクト×ネットワーク」は、それを活用して生活や様々な動きをまちづくりに反映する、という少し異なる意味で書いていた。一般的でないということであれば、川崎部会長がおっしゃった内容を分かりやすくした枕言葉のような表現を工夫する。

○市木委員

2つのやり方があると思う。今おっしゃられたように、冒頭で「コンパクト×ネットワーク」の考え方を説明する方法で、もう一つは、「コンパクト・プラス・ネットワーク」という考え方を鉤括弧書きで説明する方法である。そうした場合、「スクラップアンドビルド」の表記と、「コンパクト・プラス・ネットワーク」を中点でつながっている表記が、違和感がある。

○事務局

「スクラップアンドビルド」は、日本語でも、一つの言葉として定着しているので、括弧書きがいらなくらいの一般用語になっていると感じた。一方で、「コンパクト・プラス・ネットワーク」は、国土交通省等で使われている言葉なので、「こういう意味があるんだな」と分かってもらうには、鉤括弧書きの表現が良いかもしれない。

○市木委員

その方が表現として適切だと思う。

○麻生委員

7ページ目の「文化・景観」の所だが、「ア」の「守る」を①と②に分けて書いており、②は自然景観の話、①は人が作り出してきた景観の話かと思った。そうであるならば、①には、「自然景観」の話は入れなくても良いのではないか。その代わりに、「京町家など」の所に、「京町家や神社仏閣」といった、京都のイメージが湧くような要素を入れた方が良いのではないか。

もう一点、ア「守る」の次の言葉について、これは上位計画である「京

都基本構想」から持ってきた言葉とのことだが、「歴史の蓄積」のような表現の方がより適切ではないかと感じる。自然は良いと思うが、うまく持ってくる言葉が他にあればと感じた。

○川崎部会長

3ア②は自然、つまり「風致」のイメージで、3ア①は自然景観を取って、むしろ歴史的建築物や歴史的遺産、京町家といった「美観」の方である。京都には「美観」と「風致」という二大柱があり、①は「美観」の考え方なので、より分かりやすい表現に置き換えた方が良いという話だと認識した。その辺りを両方、整理いただければ良いと思う。

なお、3イ②の「交流するまち」で、「様々なニーズに対応し、日常に潤いをもたらす」とあるが、「健康」という言葉があまり出てこないと感じた。高齢化社会において、公園や緑地が関連するものを見ると、「健康」がまず出てくるのではないか。

また、2「暮らし」のア②の「支える機能」とあるが、「支える都市機能」とした方が良いと思った。

さらに、②「ウォークアブルなまちづくり」の「スマートなライフスタイル」について、交通手段を組み合わせた『スマート』という言葉を使うなら、2イ①で書いてあるMa a S等の情報手段を活用したといった、交通におけるスマート化のイメージを少し入れておいた方が良いのではないか。

1章に戻るが、3ページの「都市計画に関する基本的な考え方」について、「それぞれの時代の京都のまちを築き」という部分が重要であると感じた。そのため、歴史的な都から始まり、京都の人々の知恵に基づいて、「まちを発展させてきた」ということを強調すべきである。時代によって京都のまちは、思想的土壌と共に、それと調和するような形で発展・拡大してきた。これらを踏まえて、「主体である京都の人々、町衆が頑張ってきた」というイメージを少し入れても良いのではないか。

最後に、5ページの「暮らし」の所だが、「子育て」や「働きやすさ」といった言葉をどこかに入れるべきではないか。例えば、「子育て・働きやすさを促すような、魅力的な生活」といった具体策を補足するなどはどうか。

○山田委員

「スマートなライフスタイル」について、正確には「スマートな移動」だと思う。「ライフスタイル」は少し言いすぎかもしれない。「スマートモビリティ」といった言葉はよく使われる。

○谷本委員

「まち柄×アップデート」、「コンパクト×ネットワーク」といった表

現は、一般市民等には分からない言葉ではないかと思うが、それでも良いという判断なのか。

○川崎部会長

京都市として、他の自治体とは異なる表現をすることにより、インパクトを強められるか、分かりにくくなるか、というバランスが難しいところだと思う。

○山田委員

誰にでも分かることと、キャッチーさのバランスは難しい。

○川崎部会長

攻めている感じで、個人的には面白いと思う。

○事務局

「少しでも目に留めてほしい」という思いもあるので、本文に興味を持って読んでいただく意図もある。

○関口委員

内容や言葉について、5 ページ「目標とする都市の将来像」リード文の、最後にある「お示しします」という言葉が、表現として他の箇所と異なるように感じた。

それから3 ページ目の最初、「都市計画の理念」から「都市計画に関する基本的な考え方」の(1)の前までの箇所について、内容的にはとても良いと思うが、その後の文章と比べて、読みやすさが全く違うと思う。この(1)以降はすごく読みやすいが、冒頭は例えば「二項対立」など、少し硬い言葉や抽象的な言葉が多く全体的に読みにくいいため、読みやすいように全体的に修正した方が良いかと思う。

「都市計画の理念」の最初の段落「継承」と「挑戦」、そして「突破」について、「継承」と「挑戦」については、それまでの文章から感じさせるものがあるが、「突破」は突然出てくるので、内容的に「突破」を外すか、あるいはそれにつながる言葉を前に付け加えるべきだと思う。

また、言葉の点で、第3章のうち個別エリアのエリア別指針に入る前の「エリア」という所がよく分からなくなった。というのも、今までずっと使っていたが、8 ページや9 ページ辺りを見ると、「エリア」が、8 ページの①～⑤の「エリア」で表現されている。ところが、9 ページの下の凡例にも「エリア」という言葉が出てきて、さらに、個別のエリア別指針の中にも、もっと具体的な細かいエリアがたくさん出てくるので、「エリア」という言葉がどれを指すのか、今更ながら分からなくなってしまった。

○事務局

都市マスは「京都基本構想」という上位計画があり、それを都市計画

の観点でかみ砕いて、内容を落とし込んだものである。ベースとなる「京都基本構想」がかなり哲学的で、読みにくい文言もあるかもしれないが、上位計画である「京都基本構想」と関連しているということで、使った意図がある。

○関口委員

ほとんど同じ意味だが、「二項対立」を「対立」にするなど、少し変えるだけで読みやすくなりそうな気がしている。

○事務局

様々な叡智を結集して作り上げた京都基本構想の言葉なので、あまり聞きなじみのない言葉もあるが、この単語を使いたい、という箇所もある。

○森委員

8 ページの各エリアについて、今の都市マスでは「方面別指針」と言っている。これを「エリア別」と言い換えた意図はあるか。

○事務局

意図は、「方面の中でもう少しまちの特性をしっかりと見て、それを将来の目指すイメージとして書こう」、「さらにエリアについて力を入れた」というニュアンスを出したかったものであり、以前は「北部方面」などであった。

○川崎部会長

「北部方面のエリア別指針」ということか。

○事務局

そのとおり。

○川崎部会長

例えば、10 ページ目タイトルの【 】に「方面」を追記しても良いのではないか。

○是永委員

第2章で「1 活力・賑わい」、「2 暮らし」、「3 文化・景観」、「4 安心・安全」という順番になっているが意図はあるか。都市計画となると、まず「安心・安全」があり、次に「暮らし」といった話が来た方が自然ではないかと感じた。もちろん、京都が賑わい・活力を得るために、最初に「1 活力・賑わい」が来た方が魅力的だという思いもあるだろうが、1は「外から来る人」向けといった視点なのかなと感じた。まず市民のための「安全」や「暮らし」を重視し、今暮らしている人々の生活やインフラ、災害への不安などを払拭し、それをベースとした都市基盤の上に次の概念が来る、という気がする。

そして、福祉的な視点ももう少し入っても良いのではないかと感じる。

ユニバーサルデザインやウェルビーイングの話は入っているが、「福祉」というキーワードはどこにも入っていなかったように思う。その辺りは触れなくて良いか。この2点をお伺いしたい。

○事務局

意図としては、安心・安全に関連する「防災」という現行のマスタープランの順番も加味し、今回4つのテーマにまとめており、この25年間、京都市は魅力的なまちづくりを優先、あるいは強調してきたという経緯もあり、今回は「活力・賑わい」からスタートしているものである。

「福祉」については、書くとしたら「安心・安全」の「イ」の「支え合う」の所で少し余地があると思う。あるいは、利便施設も含めて、この「暮らし」の「日常生活」の所で書き込むかと考えており、現状では、それ以上の踏込みは、マスタープランの方ではしていない。

○川崎部会長

この順番については、「安心・安全」などのテーマ別方針の後の方になればなるほど、既に実施してきているものであると認識している。今、新しい課題が多く、やらなければならないこと、つまり都市計画として政策的にできるところや、ウェイト的にまだやり残しているところが順番的に1番に来ていると認識している。そのため、環境や交通などは、むしろ入っていない。景観政策なども、ほぼ出来上がっていて、今のシステムや制度の維持を継続してやっていく状況であると思っている。

そういう意味では、今一番大きな課題は「活力」で、京都市は他の都市と比べて、やはり相当落ちてきているし、そこを底上げしていかなければならない。ただし、だからといって、「安心・安全」などに力を入れない、ということではなく、そのような順番で書いているということだと思ふ。

○是永委員

「安心・安全」については、道路整備等はある程度形成できており、それを維持し、悪い所を直していく、といったスタンスだということと理解した。

○谷本委員

京都市の考え方と同感で、この順番をどうするべきかと考えたとき、1と2は、職住近接など、現に居住されている市民の方々の最も重要な生活の部分であると感じる。3の「文化・景観」、そして4の「安心・安全」は、1と2を下支えする部分なので、最後にあっても意味があるのかな、と思ふ。

●エリア別指針

○川崎部会長

15ページの「京都の玄関口～」について、この段で「京都駅周辺で、京都経済をけん引するオフィス・ラボなどの確実な開発、商業施設などの都市機能の高度集積を進める」とある。KRPのような「京都経済のけん引役であるオフィス・ラボの核」と「町家を改修したスタートアップのラボ」のような小さな拠点といった、「核」と「連携する拠点」の両方を考え、都市機能の高度集積を進める、くらいの表現があっても良いと感じた。今のまちづくりでは、大きなビルをどんどん建てていくのが難しい時代である。

また、11ページの「国際会館駅周辺、北山エリア」の所で、現状、こういった文化的要素が強いエリアで、落ち着いた環境の中で人々が豊かに暮らす拠点であるとして書いてあるが、「どうしたいか」という将来像があまり書かれていないように感じた。これを維持するのか、発展させて、もう少しこの課題をどうするといった具体策は書きにくいのか。「岡崎エリア」は「文化芸術のまちとしてさらなる進化」という表現をしているが、「国際会館」や「北山」は「賑わいが人々を惹きつけるまちを目指す」とある。「目指す」ということは、まだできていない、ということが良いか。

○事務局

より良くしていくイメージである。

○市木委員

土地勘がない人にとっても場所を分かりやすくするため、立命館大学、京都大学、佛教大学といった複数キャンパスがある大学は地図中にキャンパス名を小さくても良いので入れておいた方が良いのではないかと。

○森委員

30ページの「太秦天神川駅周辺」と、その下の「嵐電嵐山線沿線」は、エリアが重なりつつも、やるべきことが、将来像で書き分けられていると理解した。

そのうえで、「太秦天神川駅周辺」の下に「円町駅周辺」とあるが、後続するエリアとのつながりから、西部4番の上段は、「円町駅周辺」から書いた方が良いのではないかと。

それから、「太秦天神川駅周辺」は、映画村や広隆寺辺りが右京の中心なので、エリアの書き方としては、例えば10ページから11ページにかけて、「出町柳～吉田山エリア（地域中核エリア含む）」とした書き方のように、地域中核拠点がオレンジ色で、その目指すまちのエリアが地域中核拠点の範囲を超える形とすると、かなり納得できる。

また、25ページの「向日町～向日町上鳥羽線」について、ここはす

で、向日町上鳥羽線の西側への延伸事業が、令和10年度を目標に事業開始していて、順次再開発事業などもこれから着手し、整備が進みつつあるところである。これらの状況を踏まえると、「将来的に同事業により～」とあるが、かなり先の話に思えるため、あえてここは「事業が進行中」といった表現に修正した方が、現状に即しているのではないか。

○谷本委員

他府県から来られた方は、京都は本当に「医療最先端のまち」だということをよく言われる。以前にも話があったが、京都府立医科大学と京都大学の先進医療があることが中核となって、その2大学の出身の医師が京都にはたくさんいて、他とレベルが違う、とよく言われている。これを「ウェルビーイング」ないしは「医療の充実」という言葉で表すかは別として、どこかに書いてあっても良いのではないかと思った。

○事務局

入れるとしたら「暮らし」の所か「安心・安全」の所だと感じた。京都の特性である「医療の充実した、安心して住んでもらえるまち」という表現等が考えられるが、都市計画的な優先順位もあるため、どこまで触れるか、検討する。

○川崎部会長

大病院と中核になるような病院、そして通常の病院との階層構造のような、ネットワークがしっかりしているのが、今の京都の強みである。

○山田委員

以前の部会で「健康まちづくりについて記載すべき」という話をしたが、「それはどこのまちでも当たり前のことだから、あえて書かない」ということであったが、本当はもっと「健康」の要素を入れたら良いと思った。

○是永委員

地図中のマークのうち、凡例で「主な寺社」という言葉があるが、この寺社の選択はどのようにして決めているのか。

○事務局

まち柄で言及されている寺社をマークしている。

○是永委員

例えば、山科の方では、醍醐寺がエリア的に非常に重要な寺社だと思いが入っていなかったり、西本願寺や東本願寺も入っていなかったりするので気になった。

また、29ページの洛西ニュータウンの地図について、向日市を挟んでしまっているため、そこが白く抜けてしまっているが、桂川駅や洛西口駅から洛西バスターミナルをつなぐ道路は、道路交通ネットワーク上、

重要であると思う。行政が違うのは分かるが、市民は行政境を意識して生活していないため、色は薄くても構わないので、この「空白」をつなげるような表現はできないか。

さらに、21ページの「榊辻駅周辺」で、イラストが西野山団地に重なっているため、レイアウトを少し変更することはできないか。西野山団地はこれから頑張っていこうとしている事業所もあるエリアなので対応してもらえるとありがたい。

○事務局

いただいた御意見の反映、取りまとめは、今後、パブコメ冊子の印刷を控えており、時間が限られているため、部会長と調整させていただく。

(2) 今後のスケジュールについて

—— (事務局から資料5に基づき説明) ——

4 閉会

(了)